

トランス・ナショナル・マイグレーション エルサルバドル編

羽田 由紀子 (エルサルバドル外務省アドバイザー)

国際移住機構によると、21世紀初旬の世界の徴候として、今日、人類の歴史上で最も多くの人々が移動していると言う。世界では、1億9200万人の人達が生まれた国以外の国で生活しており、それは、世界の人口の3%に相当する。世界では、35人に一人が移住者という計算である。

私の住んでいるエルサルバドルは、中米の太平洋岸にある人口620万人の小国である。その人口の30%は、国外に住んでおり、彼らの移住先は、米国はもちろんのこと、スペイン、イタリア、フランス、ドイツ、オーストラリア、そしてモロッコに至るまで、世界中に広がっている。

エルサルバドルでは、1980年から12年間内戦が続いた。家を焼かれたり、人権的保護などを必要とした人々に対して、米国、カナダ、オーストラリア、スウェーデンなどの国々が人道援助の一つとして彼らに移住の機会を提供した。友人のおじさんの家にも兵士が侵入し、家財道具をすべて持って行かれ、彼は、オーストラリアへの移住を決めた。また、昨年、日本でも放映されたエルサルバドルの内戦中の子供の強制徴兵を扱った映画「イノセント・ボイス」は、映画作家のオスカー・トーレス氏の子供の頃の実際の経験を映画にしたものであるが、彼も戦争避難民としてアメリカに渡ったエルサルバドル人の一人である。

1992年、内戦は終了した。

しかし、今、エルサルバドルでは、内戦の頃よりさらに多くの人々が外国に移住している。米国政府の統計によると、米国に合法的に居住しているエルサルバドル人は、70年代には1.6万人、80年代には9.4万人、90年代には46.5万人、2000年代には65.5万人と報告されており、90年代以降、急激な増加を示している。さらに、非合法的に居住しているエルサルバドル人の数を合わせると127万人を超えると推定されているほか、エルサルバドル外務省では、その数は250万人以上、人口の40%とも推定している。どのエルサルバ

ドル人と話しても、家族の中に必ず一人は、外国に移住している者がいる。

移住者の多くは、農村部からの出稼ぎで、貧困からの脱出を目指し、家族を残し、故郷を離れた人達である。エルサルバドルの中でも貧しい東部に行くと、道も舗装されておらず、飲料水や電気もないような村に、突如として、御殿が登場することがある。また、自家用の豆とトウモロコシしか生産していないような農家でも、大きなラジオやテレビなどがあることは普通である。在外エルサルバドル人からの仕送りは、年間33億ドルを超え、それは、GDPの16%を占める。送金は、個人の家族だけではなく、国家の開発にとっても重要な資金源となっている。

米国への入国ルートは、経済状況に応じさまざまだが、過酷でありながら、頻繁に使われるのは、エルサルバドルからガテマラに続く山道を通り、ガテマラからメキシコのユカタン半島に広がる森を抜け、メキシコからアメリカに続く砂漠を通して米国に入国するルートである。特に、砂漠の道には、多くの危険が伴っていることから、インターネットには、砂漠を歩いて渡る際の注意なども掲載されている。

彼らは、あらゆる手段を使って侵入する。そこでは、砂漠で息絶えるものもいれば、トラックの荷台で窒息死するものもいる。死に至らなくても、国境鉄道に飛び乗りそこね、足を切断するものもいる。経済的に余裕のあるものは、出発前にパスポートやビザなどの偽造書類を入手し、飛行機で入国するものもいる。

移住の増加は、経済構造の変化によるところも大きい。今までならば、中流階級の人々は、贅沢をしなければ、普通に食べていくことができた。しかし、物価の上昇、雇用の縮小、企業の求めている新しいテクノロジーや、英語などの外国語も含むグローバルな変化に適應できない人達は、職を得る機会を失い、生活に困った人々は、それを乗り切るために「移住という選択」を余儀なくされる。

米国におけるラテン諸国からの人々の非合法的入国は、常に、米国政府の懸念するところで、現在も、米国政府は、メキシコ国境の壁建設計画などを含んだ移民政策の見直しを行っているが、それに対し、エルサルバドル政府では、米国における不法滞在者に対する人道的扱いを求めている。今までのところ、不法滞在者に対しては、在外大使館に登録したものに限り、特別滞在・就労に関する一時的救済措置（Temporary Protected Status: TPS）が取られているが、それは、不法滞在に関する問題の恒久的な解決にはなっていない。

サンサルバドルのコマラパ国際空港には、週に5便、米国からエルサルバドル人送還者を乗せた飛行機が到着する。毎度、75人から125人のエルサルバドル人が送還されていると報告されており、送還者の数は、毎年、増加を示している。その中には、犯罪者も含まれる。しかし、犯罪者に関しては、彼らが罪を犯したのは米国であり、エルサルバドルでは罪を犯していないので、自国では拘束されず、そのまま自由になってしまう。さらに、知り合いのエルサルバドル人によると、彼の親戚も、最近、米国から送還されてきたそうだが、その親戚は、米国にはもう20年以上も住んでいるし、子供もいるので、近いうちに、また、戻る予定だと言う。

コマラパ空港の出発便ターミナルでは、在外の同胞へのお土産に、ポヨ・カンペーロの大きな袋を持っている人々を多く見かける。ポヨ・カンペーロは、エルサルバドルの人気ナンバーワンのフライドチキンの店であり、エルサルバドル人にとっての「故郷の味」である。また、経済省の報告によると、在外エルサルバドル人を対象としたプサ、タマレス、ロココなどのノスタルジック商品の輸出は、近年の成長産業の一つとなっていると言う。ただし、牛の人工授精プロジェクトを視察するために訪問した村では、チーズを米国に輸出しているということから、詳細を聞くと、仲買人を通じ、運び屋のエルサルバドル人に販売しているということから、検疫やパッケージなどは全く関係のない世界のことだった。

今年、エルサルバドル政府は、10年に一度の人口センサスを実施する。日本は、その準備に協力しているが、現場の調査員によると、推定されている以上の人々が故郷を離れ、外国に出ており、その代わりに、近隣のニカラグアやホンジュラスから人々が移動していると言う。彼らは、以前から、コーヒーの収穫に従事するためにエルサルバドルに来ていたが、今、エルサルバドル人の移住によって不足した労働力が、彼らによって埋められようとしている。エルサルバドルは、移住者の送り出し国であると同時に、移住者の受け入れ国にもなっているのである。

さて、日本人の移住といえば、ボリビアやペルー、ブラジルなどが知られており、サンパウロの日系人は、すでに100万人を超えているほか、今年は、パラグアイの移住も50周年記念を迎える。多分、我々の多くは、移住と言うと、一度、母国を離れたら、外地に一生生活するというイメージを持つと思う。しかし、外地に生まれたエルサルバドル人や一部、例外はあるものの、一般に、エルサルバドル人移住者の多くは、移住国と母国の間を頻繁に行き来し、母国と母国にいる家族との関係を強く維持しており、外地においても、エルサルバドル人としてのアイデンティティをしっかりと持ち続けている。

